

94 モーイ親方（又）（勉強）

モーイ親方といったら、何でモーイ親方と言うかという、何だかこの、連れの連中、同級生なんか、「貴様来い、来い。行こう」と呼びに行っても、もう馬鹿みたいに髪を伸ばしてみな。伸ばしたやつは沖縄弁でいたいモーイといった。髪を伸ばしてよ、頭を何もしない。それで、カンターワウー（髪をぼうぼう伸ばしていること）とかモーイとか言うんだが。それであざ名になっておるさ。みんなで「あれはモーイだから」と、あざ名みたいにみんなでモーイ、モーイと名前を言つて。まあ、あざ名になるとるんじゃが。

その人はいつも、連れの連中が学校、教育に行つた場合は、やつぱ侍の子だから、だから、親父は首里城の役を持っているから、沖縄、琉球王の。だから、親父なんかが怒つて、

「何でいっしょに勉強ができないか。親の面目だから」

といって言うとするんだが、

「はい、はい、わかりました」。それでみんなにこうして。親父なんかもまた出張。琉球王の側役だから、山に行ったら何かないですか。ああいう役だから。

それで、床下にバナナの葉っぱ、あれを持って行って、墨をすって、床下で隠れて勉強をやっておるらしい。だから、それはまた誰も知らんわけさ。誰も知らんから、いつもモーイは馬鹿者と。馬鹿もんにはフリムンと。モーイブラーと。フリムン、フリムンと言ったですね。

それで、先生はひとつだから、また、夜は、隠れて先生のところに行くらしい。人目に見えないように。だから先生が、

「もう、うちよりはモーイのほうが頭は優れておるから、あれを置いて見習いやつたらいいんでないか」とか言ったら、連れの連中はびっくりして、

「何だ、あんなモーイブラーが。何がわかるか」と。それで、みんなが、四・五名ぐらい行って。

「そこにモーイおるか」

「ああ、いますよ」ってお母さんが言って。そしたら、

「モーイと話をするためによく来た。こっちが馬鹿もんであつたら、そんなにみんなでいじめて馬鹿にしておったが、もう非常に親なんか悲観して、精神的に小さくなっておる」。だが、一応と思つてやつたら、

「わからんもんも全部わかるか。字、お前、この字読めるか」と。モーイは先生みたいな腕になっておるから、あれたちはもう顔を真っ赤にして帰つたらしい。

だから、後から先生に聞いたら、

「あれから床下でいつまでも勉強しておる。もう上達して先生よりも上だよ」と言うて。

字北波平 大城清助

類話

字糸満 上原カメ、玉城初子

字北波平 当銘キヨ

字武富 大城トミ、大城キヨ、大城スミ

字豊原 国吉マツ

字糸洲 中村カツ

字伊原 上原孝助